

富岡の桜

未来へのバトン

大切なおだがいさまの心

◆この題字名にした理由 富岡町のシンボル「夜の森の桜」。原発事故後、夜の森の桜はバリケードで隔てられました。題字は、それでも春になるとけなげに咲く桜に、愛おしさを感じている町民の心を表しました。取材班5人が話し合っ、て決めました。

富岡町3・11を語る会

青木淑子代表

2023(令和5)年春の全地区避難指示解除を目指している富岡町で、青木淑子さん(73)はNPO法人「富岡町3・11を語る会」の代表を務めています。震災語り部の青木さんは「放射線の被害は目に見えませんが、それだけに原発事故被害を言葉にする役目が大切」と言います。東日本大震災・原子力災害伝承館で青木さんの口演を聞き、震災を伝える活動を取材しました。

富岡町と川内村の住民は、郡山市のビッグパレットふくしまに避難しました。ピーク時には3000人に達し、広いスペースが人で埋まり、ストレスは極限に達しました。同市に住んでいた青木さんは毎日、避難所支援に通ったそうです。震災前、青木さんは富岡高

の教師で、町になじみがあつたのです。おだがいさまセンターで、青木さんは新聞を作り、目が悪くて新聞が読めない人にはミニFMで情報を伝えました。

震災後2年が経ち、自分たちの町で何が起こったのか伝えようと、センターのコミュニティの中から語り部のグループが生まれました。

語り部の口演では、富岡町から川内村に向かう

伝承館前に立つ青木さん(左)と取材班



一本道が避難の車で大渋滞している写真が紹介されます。30分の道が3時間もかかりました。「すぐ帰れる」と思っていた町民の横には、防護マスク姿の警察官が交通整理をしていました。あとで情報の格差を痛感したそうです。また、母牛に死なれた子牛が、震災1ヵ月後も生き残っていた話もありました。長年牛を飼っていた人によると、自分の子以外に乳を飲ませることはないそうです。震災の極限状態で、牛も助け合ったのでしようか。

青木さんは17年4月、富岡町に移住しました。町民と同じように町を愛しているからだそうです。「人生を根こそぎ変えた原発事故被害」を語るのは「被災者の責務」と訴えます。「町を創るのも壊すのも人。人に寄り添い、町のコミュニティを再生したい」と将来の夢を話してくれました。(小林幸乃、渡邊莉菜)



伝承館内を見学する参加者

震災語り継ぐ



富岡町の思いと語り部活動について話す青木さん

青木さんインタビュー

次世代の伝承者育てたい

私たち取材班は青木さんに活動を通しての思いを聞きました。

Q、これからの課題は何だと思いますか。

A、若い世代の語り人(語り部)育成です。現在活動している人の大半は高齢者。震災を語る語り人がいなくなってしまう。表現力育成イベントや若者向け教室に力を入れています。

Q、語り部で学んだこ

とは。

A、人に伝えることは難しい。話し方の勉強になります。語り人の話を聞く人に合わせて、話す内容を変え、正しく伝えられるように気を付けています。

Q、富岡町の変化はどう感じますか。

A、町は今、3種類の住民がいます。復興関連で住んでいる人、旧住民、そして私のような移住し

てきた新住民。震災以前の町と違います。若者の学校と多様な人が話せる場所がほしい。特に学校は地域をつなぐ大切な存在と感じます。

Q、どこまでいけば、町の復興といえますか。

A、確かに、施設や道路は新しくなり、目に見える復興は進んでいます。一方で、いろんな立場の住民同士が違和感なく住め、分かち合えるよ

うになれば、内面まで復興したと言えるのでは。

Q、震災のことを話していて辛いのですか。

A、震災当時、郡山にいた私は原発事故避難を経験していません。経験した語り人によると、思い出してしまうと辛くなることがあるそうです。聴衆が共感してくれると、気持ちに通い心が整理されると言います。コロナ以降、オンラインが増えましたが、気持ちが大より通うライブの場は大事です。(富田紗那、中島空音、八木沼杏菜)

私たちがつくりました

今度は私たちが伝える

今回初めて語り部の方の話を聞きました。今まで小学校、中学校でも震災のことを聞いたり話したりする時間はありませ

語り継ぐ大切さ

初めて語り人口演を聞き、もう薄れかけていた当時の記憶を思い出しました。被害が目に見えない災害である原発事故は

故郷を言葉で繋ぎたい

私は語り部の青木さんから、富岡町での震災の話を聞きました。様々な人の体験の話から、多くの人の人生を変えた出来

原発まだわからない

私は震災当時、まだ2歳でした。だから、原発で水素爆発が起きたことは分かりませんが、どのよう

忘れないで伝えよう

私が生まれて間もないころ、震災が起きました。青木さんは「赤ちゃんを育てていた親が一番大変だ」と話していて、きつ

佐野 宏翔 (大学生・20歳)



ジャーナリストスクールの卒業生として、取材や記事づくりの手伝いをさせていただきました。小学生から高校生までが

先日首都圏近郊で大きな地震がありました。それを機に震災当時のことを教えて欲しい、と言われることが増えました。11年前の当時確かに

野 宏翔

浜松 郁美 (会社員・23歳)



OB・OGからエール

踏み込む勇気／伝える楽しさ



浜松さんから紙面作成のレクチャーを受ける記者

「難しく伝える」ことはとても難しいです。ジャーナリストスクールOGとして参加するのは2回目になります。誰に何を伝えるために取材をするのか、どうやって自分の言葉で記事にしていけるのか、子どもたちにその楽しさ・考える楽しさを感じてもらおう手助けができれば嬉しいです。

(浜松郁美)



青木さんに語り部の活動について質問する記者